

## イギリスにおける経済学史研究の現状一斑（二）

——ケムブリッジ大学におけるその近況を中心として——

松 田 弘 三

### 八

一九六二年十二月十七日から翌一九六二年一月十四日までのロンドン滞在中のわたくしの主な仕事は、もっぱら University of London Library——すなわち Senate House の四階にある Goldsmith's Library ほかに二つの図書室と、London School of Economics にある British Library of Political and Economic Science に通って、経済学史にかんする貴重な文献、とくにわたくしが研究テーマとした十九世紀前半の社会主義経済学の重要文献をもとめて、そのうち必要なものをマイクロ・フィルムにおさめようとするのであったが、クリスマス前後一週間は図書館も休みになったり、正月早々ロンドンが酷寒に襲われたりして、予期のようには捗らなかつた。ゴールドスミスズ・ライブラリーは Foxwell 教授の蒐集をもとにして経済学の古典約六万冊を蔵した経済学史研究者にとって最善のコレクションで設備雰囲気も実に良い。しかし社会主義関係の文献はむしろブリテイッシュ・ライブラリー・オブ・エコノミック・サイエンスの方にいくらか多いようだが、ここは蔵書数もけた違いに多いかわりに、場所も大学本部から遠く、いつもロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの学生で超満員で居心

地は良いとはいえない。ともかくこの二カ所でマイクロに留まらなものは Charles Hall, William Tompson, John Gray, Thomas Edmonds, John Francis Bray などリカード派社会主義者の文献若干と『The Source and Remedy of the National Difficulties, 1821 (by Charles W. Dike)』と Some Thoughts on the Interest of Money in general, about 1738. の二つの有名な匿名の文献その他であった。ロンズンの数多くの古本屋でも珍らしい文献はほとんど入手できなかったし——一九五七年にはじめて出版された J. F. Bray, A Voyage From Utopia ぐらいか——、わたくしのばあいは、留学の眼目をケンブリッジ大学での経済学の学風を体得することにおいたために、文献蒐集の方はどうしても不十分を免がれなかった。

## 九

こうして一月十五日、この Lent Term からはいきよ Mr. M. H. Dobb, History of Economic Thought の聴講を主目的として、ふたたびケムブリッジに帰ってきた。

ドップ教授の「経済思想史」講義は、一月十八日から毎週木曜の正午から一時間、ミル・レエンのレクチュア・ルームで八回にわたっておこなわれ、フィジオクラート(ケネー)、アダム・スミス、リカード(およびマルサス)、J・S・ミル、からマルクスにおよんだが、とくに理論史の色彩の濃いものであった。わたくしはとくにテーブ・コーダの使用を許可され、ノートとあいまって詳細な記録をとってきたが、その紹介は要旨にとどめるほかはない。なおこの講義はつぎの Easter Term までつづき、三、四回でジュヴォンズ、マーシャル、およびピグーなどを論ぜられるとのことであったが、これは聴くことができなかった。

第一回の講義は、いわば総論であつて、この学期には古典経済学からマルクスまでをとりあつかひ、主として Adam Smith, David Ricardo, John Stuart Mill, Karl Marx といふ論じ、あつた T. R. Malthus, Nassau Senior, M. Longfield を、またちかのちひ Franois Quesnay, David Hume を、ちひまた James Mill, R. Torrens, J.-B. Say, T. R. McCulloch, Samuel Bailey を問題にすることをあきらかにされた。そしてその方法としては、古典経済学などの歴史的背景をきわめるとともに、おのおの理論体系の歴史的位臚づけをあきらかにし、さらにその個々の学説を経済学の流れのなかでとらえるべきことを強調された。そしてまず、当然のことながら、アダム・スミスを Political Economy の創始者と評価され、その基礎原理たる労働価値論とともに、スミス——リカード——マルクスという継承・発展の関係が経済学の正統であることを確認された。ついでスミスの経済学がマーカントイズムとの対抗において成立してくる経緯が説明され、セーヤマルサスの人口論や J・S・ミルの学史的位臚にふれられたのち、フィジオクラシーなかんずくケネーの学説の内容がやや詳細に説明された。すなわち、「純生産物」の概念、農業のみが「生産的」であるとすゝケネーの観念、「経済表」の説明、「前払」としてのケネーの資本の概念などについてである。このように学説展開の順序にとられず、経済学の歴史全体をつかんで、これを論理的に整理して提示するというゆき方は、経済学史の序論として、きわめて異色あるものとおもわれた。

第二回(一月二十五日)および第三回(二月一日)の講義は、あつた Adam Smith (1723—1790) について論ぜられた。まず、スミスにおける経済学成立の背景として、それが産業革命前夜のマニファクチュア時代の産物であつたことをのへられ、いふ、"Wealth of Nations," 1776 の構成の概略にうひつて、その端緒が分業による生

産力の発展の分析におかれていること、その理論体系は資本主義体制を資本の蓄積を中核として把握したものであることが強調された。それからスミスの伝記について、師ハチソンの影響、ダヴィッド・ヒュームとの交友、とくに一七四九年ごろの「エディンバラ講義」のなかに「自由の恩沢」「事物の自然のなりゆき」の思想がみられることがのべられたのち、一七五一年からはじまるグラスゴー大学におけるスミスの道徳哲学の講義を論じて、その第四の部分、すなわちのちに発見され公けにされた彼の講義ノート（『正義・行政・収入および軍備にかんする講義』一八九六年刊）の後半が、経済学にかんするものであったことが説明された。それから一七六六年からのフランス旅行においてうけたフィジョクラートからの影響、『国富論』の著述の経過がのべられ、さらにスミスの経済学体系すなわち『国富論』の特色が、マーカンテイリズムにたいする批判として、価値論を基礎とする競争の理論としめされるとも、以前の諸学説すなわちマンデヴィル、ウィリアム・ペティ、ジョン・ロック、フランス重農主義などの思想と理論との総括であることがあきらかにされた。そしてスミスの経済理論をとりあつかうべき視角として、分業論を基礎とする生産力の発展にともなう剰余の生産の問題と、商品の価格の把握の原理としての労働価値論ならびに貨幣の本質の問題が指摘された。

このような第二回の講義を前提として第三回には、スミスの価値・価格論ならびに分配論の問題が深くほりさげられた。すなわち、一ブッシェルの穀物を生産するのに要する費用が、一七〇〇年には三労働時間であったものが、生産力の上昇の結果、一七七六年には二労働時間に低下したとすれば、そもそも穀物賃銀が一時間あたり四分の一ブッシェルであるとすれば、そのときには穀物一ブッシェルについて、一七〇〇年には賃銀は穀物四分の三ブッシェル、利潤は四分の一ブッシェルであったものが、一七七六年には賃銀が二分の一ブッシェル、利

潤も二分の一ブッシェルとなつて、生産力の上昇の結果利潤は増大することとなる。しかるにもし賃銀はいぜんとして一時間あたり四分の一ブッシェルであるとすれば——すなわち実質賃銀が不変であれば——、一ブッシェルの穀物はいまや四労働時間分の労働を支配することになるであろう。かくして生産力の発展につれて資本の蓄積はいよゝゝ急速となるということになる。これがアダム・スミスの問題、すなわちスミスの価値論を基礎とするその分配論の帰結であると、ドップ教授はいわれるのであるが、もちろん、このままの記述が『国富論』のなかにみいだされるのではなくて、これはスミスの理論をドップ教授自身が見事に再構成されたものとおもわれる。それは、ドップ教授の卓抜な理論的分析力をしめすものであるとともに、その経済思想史講義が非常な短時間のうちに広範囲にわたつておこなわれ、極度に圧縮されたかたちをとっているにもかかわらず、いかに高度の学問的水準を保っているかを証明するものであるとおもわれる。

以上のようなスミスの経済理論の總体的把握を提示されたのちに、さかのぼつてその価値・価格論の分析がなされた。スミスが交換価値の眞の尺度が労働であるというとき、それは支配労働量と投下労働量との二つのものを意味していたことはいうまでもないが、いわゆる「初期未開の社会状態」においては両者は量的に一致し、ともに価値の尺度たりえた。「投下労働価値説こそ本来の労働価値説にはかならないものであるが、スミスが価値の尺度を支配労働量にもとめていることは、商品交換をつうじての個人的諸労働の等置、すなわち社会的労働の把握をしめすものであつて、それによつて彼は事実上価値の实体(抽象的人間労働)を把握したものと見えよう。もつともこのことは彼が、価値の尺度を他の商品に対象化されている労働量のみならず購買しうる生きてゐる労働量にもとめ、「労働の価値」(労働力の価値) 事実上賃銀をもつて尺度とみなすにいたる原因となつたのであるが、——筆者——しかるに「資本の蓄積と土地の私有」以後の社会に

においては、投下労働量と支配労働量とは一致しなくなる。すなわち利潤および地代が発生し、それらが彼によって投下労働量と同一視されている賃銀とならんで、商品価値の構成部分となるとされているのである。このようなスミス価値論の変化は、ドップ教授においては、労働価値説から生産費説への移行であり、J・S・ミルからマーシャルへとつづく需要供給説にさえつながらるところの俗流的見解の萌芽であると解されているものようである。「だが、これはあまりに通説的な解釈ではあるまいか。問題はスミスの「初期未開の社会状態」をいかに解するかにかかっているとおもわれるが、その点はあとにゆずるとしても、スミスの自然価格（賃銀・利潤・地代から構成される価格）が価値とは異なる生産価格にはかならないことはあきらかであろう。」

ドップ教授はさらに、社会の進歩にもなって農業生産物の価格は騰貴し、工業生産物の価格は下落し、また地代と賃銀は上昇し、利潤は一般的に下落するというスミス経済学における動態論、および『国富論』第二編にみられるスミスの再生産理論（「――すなわち、彼は元来いわゆる「アダム・スミスのドグマ」によって、商品価値を $V+m$ に分解し $C$ を無視していたが、社会的再生産過程の考察にあたっては、総収入と純収入との区別を導入することによって、結局不変資本部分のみとめるにいたったのであり、またこのことと関連して、スミスは事実上生産手段生産と消費資料生産との二部門分割にもつづく再生産過程の把握に、いま一步というところまできていたのである。」）についてもべられたが、時間の制約もあって、十分には展開されなかった。

第四回（二月八日）および第五回（二月十五日）の講義はもっぱら David Ricardo (1772-1823) にあつられた。まずスミスからリカードゥへの過渡期を代表する文献として、一七九八年のマルサスの『人口の原理』（第二版は一八〇三年）、一八〇三年のベンサムの『経済学綱要 (Manual of Political Economy)』、一八〇八年のジェームズ・

ミルの『商業擁護論 (Commerce Defended)』、一八一五年のマルサスの『地代の性質と増大およびその決定原理にかんする研究』、ウェストの『土地への資本投下にかんする小論』、およびリカードの『低い穀物価格が資本の利潤におよぼす影響にかんする小論』をあげられ、周知のようにアダム・スミスにさえ農業労働は工業労働よりもより生産的だという重農主義的思想ののこりかすがみられたこと、十八世紀から十九世紀へのかわり目ごろのイギリスでは重農主義思想がかなり有力であって、ジェームズ・ミルの『商業擁護論』はこのような重農主義の代表者たるウイリアム・スペンスの『商業無用論』(William Spence, Britain Independent of Commerce, 1801) への反駁であることが説明された。同時にセーが『経済学概論』(J.-B. Say, Traité d'économie politique, 1803) にのべたところの販路説——一言でいえば「生産はみずから市場をつくりだす」という学説——に酷似した理論が、ミルのこの書物のなかにみいだされることが説明された。さらにまたアンダーソン(J. Anderson) ウェストをへて地代理論とともに「収穫逓減の法則」がマルサスによって引きつがれていることもべられた。これらのマルサスの人口論、ペンサムの功利主義思想、セー法則（まずミルの理論として）、「収穫逓減法則」などが、リカードの経済学につよい影響をあたえたことは自明のことからである。

さてリカードの経済学がスミスのそれをこえている基本的な点として、彼が分配法則の決定を経済学の主要問題と宣言することによって、(リカードにおける分配は、「生産過程の内部にふくまれていて生産の仕組を規定する分配」の意味をもつものであったから) スミスより以上に「すぐれて生産の経済学者」であったこと、そしてそのことが結局、産業革命の進行にもなう資本主義の確立という現実の反映であったことがあきらかにされたのち、リカードの伝記が簡潔にのべられた。すなわち、株式業者として成功したりカードが経済学者として登場し、一八

一〇年の The High Price of Bullion によつて「地金論争」における一方の代表者としての地位を確立して以来、マルサスとのあいだに主として書簡によつて戦わされた通貨問題、および一八一四年以降の「穀物条例」をめぐる論争が、やや詳しく説明された。とくに一八一四年三月のリカードゥの手紙のなかでのべられた「農業利潤が他のすべての産業の利潤を規制するものである」という命題の重要性が指摘された。「この命題の論拠は——『リカードゥ全集』第一巻の解題にのべられているように、——農業においてはおなじ商品すなわち穀物が投入と産出の双方を構成し、したがつて農業利潤は価格変動から独立しているという想定であつて、このような理論は初期のリカードゥに特徴的なものである。」そしてこのマルサスとの論争の過程において、資本の蓄積は食糧獲得の困難を増大させることによつて賃銀の騰貴をもたらし、この賃銀の騰貴こそが利潤の低下の唯一の基本的原因であるという、リカードゥの理論体系の骨格が形成されたことがあきらかにされた。「なおこの自己の理論を補強するために、リカードゥによつてセー法則が援用されたのである。」かくして一八一五年二月の『低い穀物価格が資本の利潤におよぼす影響にかんする小論』(An Essay on the Influence of a Low Price of Corn on the Profits of Stock)において、彼はこの穀物価格騰貴→賃銀騰貴→利潤下落という自己の基本的見解をあきらかにすると同時に、その基礎理論としての差額地代法則を定式化したのであつた。ここで重要なことは、リカードゥが「穀物の価格が他のすべての物の価格を規制する」という以前の見解を放棄し、賃銀の騰貴は生産物の価格を騰貴させるといふ通説の見解(それでは利潤の下落は不明瞭となる)を克服して、交換価値を規制する原理を生産の難易——それは究極的には労働量を意味するものでなければならぬ——にもとめるにいたつた、ということである。ただし『小論』における価値論はまだ「未発展な形態」のものであつて、厳密な意味の労働価値論というよりは、なお生産費説であつたといわなければならない。

しかしこの価値論の問題も一八一六年までには解決され、敢密な労働価値法則の把握の基礎のうえにたつ『経済学および課税の原理』（Principles of Political Economy and Taxation）が、一八一七年四月に刊行されるにいたった。『原理』では、この労働価値論の基礎のうえに、「地代、利潤および賃銀の自然のなりゆき」、すなわち社会の発展にともなうて、穀物価格したがって賃銀（貨幣賃銀）が騰貴し、それにつれて地代は増加するが、利潤は下落するという法則が展開されている。（このようにリカードが利潤と賃銀との相反関係を確言し、これを自明のことからとみなしていることは、資本制生産の矛盾を曝露するものではあるが、彼は利潤の本質、源泉の問題をすこしも究明しようせず、むしろこれを意識的に回避しようとしているのである。）このような生産力の増大にともなう、分配三範疇の変動を中軸とするリカードの経済の動態的把握は、彼の理論体系全体を一個の資本蓄積論たらしめているものである。

以上のようなリカードの体系の総体的把握のうちに、その価値論のほりさげた分析がなされた。すなわち、リカードの『原理』第一章におけるスミス価値論の批判、とくに商品の交換価値はその生産に必要な労働量によってのみ規定され、スミスのいっているような、その商品によって支配・購買しうる労働量、すなわち「労働の価値」、結局は賃銀によって規定されるものではないという批判は、支配労働価値説の止揚と投下労働価値説の貫徹とみなされ、それはリカードのスミスからの理論的前進であり、価値の尺度を結局支配労働量にもとめたマルサスにたいする理論的勝利であると評価された。（ただし、交換価値⇌相対価値の基礎によつたわりそれを規制するものとしての、リカードの「絶対価値」の概念、すなわち彼の価値の実体把握の問題と、この点において『原理』よりの一歩前進をいしているとおもわれる遺稿『絶対価値と交換価値』（一八二三年、『全集』第四巻所収）とについては、とくにふれら

れなかつた。』そして第一章第四、五節におけるリカードウのいわゆる価値修正論の問題にすすまれ、流動資本と固定資本との割合および固定資本の耐久性その他に差異があるときには、賃銀の騰落もまた——比較的軽微な程度においてではあるが——、商品の交換価値を變動させる原因となるという、リカードウの所説が説明された。しかしながら、この問題は本来価値論の領域にぞくするものではなくて、平均利潤率の成立にともなつて価値がそれとは異なる生産価格に転化されることを意味するものであるが、リカードウにあつては、平均利潤率は自明のことからとして前提されており、価値と生産価格（自然価格）とはまったく同一視されていたために、それが価値論の修正として意識され、——いわゆる価値の不変の尺度の題とあいまつて——、最後まで彼の頭を悩ましつづけることとなつたのである。リカードウ教授は、リカードウの価値論プロパーはいわばミクロ的な分析であり、これにたいしてさきにもたような分配三範疇の變動關係を中核とするリカードウの全理論体系はダイナミックなマクロ的分析であつて、両者がリカードウにおいては有機的に一体化していることを強調されたが、それはまったく正しい見方であるばかりでなく、近代経済理論にたいする古典経済学の基本的な優越性をしめすものであろう。

## 十

第六回（二月二十二日）から第七回（三月一日）の講義の前半までは、John Stuart Mill について論ずるとされてきたが、実際には第六回の前半はリカードウから J・S・ミルにいたるまでの経済学、すなわちマルサス、トレンズ、ベイリー、ロングフィールド、シーニアなどの所説の解明にあてられた。

また Thomas Robert Malthus (1766—1834) については、その『人口論』（一七九八年、第二版 一八〇三年）のこ

とはちぎにもふれられているので、ここではリカードとの往復書簡と『経済学原理』（Principles of Political Economy, 1820, 2nd ed. 1836.）を中心として、その経済学のリカードとの差異が問題とされた。第一に、穀物条例の問題にかんして、リカードは「自然のなりゆき」にしてすでに穀物価格の騰貴にともない地代を上昇させるに反し、おなじ原因による賃銀の騰貴の結果として利潤を下落させるのであるから、そのうえ人為的に安い外国穀物の輸入を阻止することは有害である、との産業資本家階級の立場を主張したのたいていして、マルサスは、農業の保護は国家的見地から必要であると唱えて地主階級の利益を擁護しようとした。「そして両者の見解の相異の基礎には、地代の本質を自然の賜物とみなすマルサスの重農主義的思想と、地代をたんに利潤の移動部分にすぎないと考えるリカードのブルジョア的な、しかしそのかぎり正しい見解との対立が横たわっていた。」第二に、マルサスは有効需要に比べて過剰な供給をもたらすような資本の過剰蓄積は全般的過剰生産をひきおこすであろうと主張したのたいていして、リカードはセー法則を援用して生産はみずから市場をつくりだすから過剰蓄積による利潤の低下や全般的過剰生産はありえないと論じた。第三に価値論については、マルサスは価格のみならず価値もまったく需要供給によって規定されると主張し、ただ価値の尺度についてのみ結局支配労働量をもって尺度となしているのたいてい、これは、——リカードからリカード派社会主義、さらにはマルクスによって継承・発展されてゆく労働価値論に対立して、——J・S・ミルからマーシャルへとつながってゆく俗学的な需要供給説の——スミスにその萌芽があるとはいえ、——発端というべきものであろう、とされた。

つぎに R. Torrens は、平均利潤法則のために労働価値法則は廃棄されるとなし、また利潤はまったく流通過程から発生すると考えて、いっそう俗流的な傾向をしめしたし、S. Bailey は、価値はその性質上本質的に相對

的なものであると唱えて、リカードゥにみられる絶対価値または眞実価値すなわち価値の実体の問題を抹殺しさ  
らうとした。

このような俗流的傾向は、リカードゥの死（一八三三年）後——労働者階級の発展とオーウェン主義の普  
及やリカードゥ派社会主義の抬頭につれて——ブルジョア経済学界において急速に支配的となり、M. Longfield  
の限界効用価値説の定立や、Nassau Senior の利潤の源泉としての資本家の「節欲」(abstinence) 説の「発見」  
によって、一八三〇年代には弁護論的な俗流経済学が完全に成立したのである。

John Stuart Mill (1806—73) の歴史的地位は、このような経済学の流れのなかでとらえられなければならない  
けれども、彼は完全な俗流経済学者とはやや異なっていたと評価される。シュムペーターの『経済分析の歴史』  
(一九五四年)は、スミス——マルサス——J・S・ミル——マーシャルのラインにおいて考えているが、それは一  
応正しい。若きミルは父ジェームズ・ミルによって、ベンサム功利主義とリカードゥの経済学とを教えこまれ  
たが、長じて一種の人道主義者となり、社会主義にもある程度の同情をもつようになった。ミルは、主観的には  
古典経済学の伝統をうけつぎ、これを集大成するとともに、これにある程度の修正を加えて現実に適応させよう  
としたのであったが、右のような経済学界の潮流のなかでは、それはたんなる「折衷論」となり、「ブルジョア  
経済学の破産の宣告」に終らざるをえなかった。Essays on some unsettled Questions of Political Economy,  
1844 をくへ『経済学原理』(Principles of Political Economy, 1848) にしたがって、生産組織は不変であるが分配組  
織は可変であるとか、土地の私有は正義に反するとか、労働者階級の生産協同組合に将来への期待をかけるとか  
いうような、一部の社会主義思想からの影響をうけた側面と、価値論を交換論の一部とみなし需要供給説によつ

てこれを説明するとか、「賃銀基金説」によって労働運動の無効を説くとか、利潤の源泉について「節欲説」をそのまま受けられるとかいった、俗流経済学的側面との二面性がいっそうはなはだしくなった。また彼の静学と動学との区別も形式上は進歩であっても、両者が一体化し理論全体として動態論的であったりカードゥに比べれば、實質的には後退であったといわねばならぬ。「しかしそのように矛盾撞着した理論体系であればこそ——すなわち本質的にはブルジョアの利害をかたく擁護しながら、労働者階級にたいする一定の譲歩をみとめる進歩的ニュアンスをもつ思想であればこそ、イギリスの常識によくマッチし、同時代において支配的なものとなつたばかりでなく、ある程度マインツナルによって撰取されて、後代にまで大きな影響力をおよぼしたのであらう。」

Karl Marx (1818-83) にかんする講義は、右にすぐびきつづいて第七回の後半から第八回（三月八日）にかけておこなわれたが、ついに完結せぬまま一部を Easter Term にもちこされた。まずマルクスの伝記と彼の思想と学説の形成過程について、つぎのごとくのべられた。カール・マルクスは一八一八年に、ドイツのなかでナポレオンの占領によってフランス革命の思想をもつともつよくうけた地方であるラインランドのトリエルに生まれた。父はユダヤ人の教養ある弁護士であった。そして十七才のときからボン大学、ついでベルリン大学で法律学を学んだが、彼の知的関心の主な対象となつたものは哲学であった。当時はヘーゲル哲学の影響の最盛期であり、若きマルクスも情熱的にこれを研究し、やがてヘーゲル哲学の急進的・批判的要素をとりあげてこれを民主主義運動の思想的武器としようとしていた「青年ヘーゲル派」のクラブに加入した。マルクスは一八四一年に、このような思想的立場から書かれたデモクリトスとエピクロスの哲学の比較にかんする論文によって学位をえ、大学の教職につくことを希望したが、反動的な当時のプロシヤ国家においてはそれは不可能であった。そこで彼は、

一八四二年にケルンの自由主義ブルジョアジーが創刊した『新ライン新聞』の寄稿者となり、ついで主筆となった。そこでマルクスは時事的な社会経済問題に直面し、また共產主義思想の問題に直面した。『新ライン新聞』が政府の忌避にふれたため、マルクスは翌四三年はじめにみずから辞任し、まもなく相愛のイェンニーと結婚した。そして新しい雑誌『独仏年誌』を発行するために、この年の秋パリに移った。マルクスはこのときすでに、主としてヘーゲル法哲学の批判的研究の成果として、私的所有の廃止による「人間の解放」という目標とそれを実現すべき階級としてのプロレタリアートという革命思想を抱いていた。しかし彼はパリでフランス社会主義とイギリス古典経済学とを研究し、とくに一八四四年はじめに発行された『独仏年誌』への寄稿を契機として、マンチェスターにおいてイギリスの社会主義と労働運動との接触によって彼とほぼ同様の思想に到達していた Friedrich Engels (1820-95) と知りあい、生涯かわらぬ協力関係をむすぶことによって、さらに経済学の系統的研究への拍車をかけられた。一八四五年はじめプロシヤの圧力によるフランス政府の追放命令をうけてブリュッセルに移ってから、マルクスは経済学の研究をつづけるとともに、エンゲルスと共同で新しい世界観——弁証法的ならびに史的唯物論の創造をなした。『ドイツ・イデオロギー』一八四六年執筆）それと同時に西欧の革命的労働者運動の組織化に尽力し、一八四七年の冬ロンドンでひらかれた共產主義者同盟の大会に出席し、その委嘱をうけて、一八四八年はじめに歴史的な『共産党宣言』(Manifest der Kommunistischen Partei) を発表した。一八四八年二月フランスにはじまった革命がドイツに波及するや、マルクスとエンゲルスは帰国してケルンにおいて『新ライン新聞』を発行して革命を指導した。しかし革命の敗北によって翌四九年春新聞は禁止され、マルクスついでエンゲルスはロンドンに移った。

マルクスがみすぼらしい家に住み極度の貧困に苦しめられながら、経済学の広範で徹底的な研究を再開したのは、一八五〇年の後半からであった。「エンゲルスはマンチェスターで実務についてマルクスを援助した。」マルクスはブリテイッシュ・ミューゼウムに累積された経済学文献をかたっぱしから読破し、尨大な手稿を書きあげた(とくに一八五七—八八年に)。これを基礎として、まず、一八五九年六月『経済学批判』(Zur Kritik der politischen Ökonomie)第一分冊が発行された。マルクスの経済学研究はさらに継続され、とくに一八六一—三年に尨大な手稿を書き、これを仕上げることによって、一八六七年九月『資本論』(Das Kapital)第一巻が刊行された。同時にマルクスは『国際労働者協会』(第一インターナショナル)の創設に努力し、一八六四年九月ロンドンでひらかれたその創立大会に参加し、宣言および規約を書き、総務委員会のメンバーとして活動した。しかし(一八六〇年の末にエンゲルスが実務から退いてロンドンに住むようになってのちまもなく)、一八七〇年代のはじめからマルクスの健康は次第におとろえ、『資本論』の続巻とくに第二巻のための原稿執筆をなおつづけたけれども、一八八一年末妻に先立たれたのち、一八八三年三月十四日死去した。マルクスの遺稿は、エンゲルスの十年余にわたる苦心の編集によって、『資本論』第二巻(一八八五年)および第三巻(一八九四年)として完成された。なお経済学の批判的歴史よりなる第四巻は、カール・カウツキーによって一九〇五年に『剰余価値学説史』(Theorien über den Mehrwert)として刊行された。

そこでマルクスの経済学説の解説にはいるわけであるが、そのまえにその前提として史的唯物論について一言されている。この史観は、いかなる歴史段階の社会についてもその一般的性格は結局のところ生産様式によって——とくに人々がその生産の経過のうちにいりこむところの関係によって——規定されるということを意味する。

したがってこの史観は、資本主義社会の経済的運動法則の基礎によこたわるものとしての労働価値法則の認識と  
きわめてよく適合し、それらはたがいに緊密にむすびついているのである。

もちろんマルクスの労働価値論は、イギリス古典経済学——とくにスミスおよびリカード——のそれを継承  
・発展したものであるが、同時にそれを変革している。(すなわち、彼は価値を交換価値から抽象し、価値の実体概念をあ  
きらかにするとともに、使用価値を生産する「具体的有用労働」と価値を形成する「抽象的人間労働」との「商品にふくまれて  
いる労働の二重性格」をはじめて明確に把握し、また価値を交換価値たらしめ、商品と貨幣との内面的つながりをあきらかにす  
る「価値形態」をはじめて分析したのである。)とくに古典経済学者たちは、労働価値論から必然的にみちびきだされ  
てくる剰余の問題、すなわち利潤の源泉の問題を、——その萌芽はみとめられるけれども——解決していない。  
もっともタムスン (W. Thompson) やブレイン (J. F. Bray) などのような社会主義者は、労働価値論から出発してこ  
の剰余の問題を解決しようとしたけれども、その説明は不十分なものであった。マルクスは諸商品の価値どおり  
での交換ということを基礎として利潤を説明せねばならぬと主張し、この問題を、資本制生産は一部の者の手中へ  
の生産手段の集中と自分自身を彼らに売る以外に生計のすべをもたない大部分の者への社会の分裂のうえにな  
りたっていること、したがって労働力も一種の商品として売買されるが、それはそれ自身の価値よりも大きな価  
値をうみだすという独特の資質をもっているということ、そしてこの差額たる剰余価値こそ資本家が手にいれる  
利潤の源泉であること、をあきらかにすることによって完全に解決したのである。それは、この明白な事実を陰蔽  
しようとするその後のブルジョア経済学者たちのありとあらゆる詭弁にもかかわらず、真理なのである。

ところでマルクスにたいするもつとも重要な批判とみなされているものは、オーストリア学派のポエーム・バ

ヴェルクの、いわゆる『資本論』第一巻における価値論と第三巻における生産価格論との矛盾の問題である。第一巻では労働力の購買に投下された可変資本にたいする剰余価値の比率としての剰余価値率がとりあげられたが、第三巻では剰余価値の資本総額——すなわち可変資本プラス不変資本(原料・機械などに投下された資本)——にたいする比率としての利潤率がとりあげられ、不変資本の可変資本にたいする比率(すなわち「資本の有機的構成」)が高ければ高いほど利潤率が低くなること(が)あきらかにされた。このようにして、もし利潤率が等しくないならば、資本はこの率が低い部面から高い部面へ移動し、前者における産出高を縮小させ、価格を騰貴させ、後者における産出高を拡大させ、価格を騰貴させる。この諸資本の競争の結果、さまざまの生産部面における利潤率は均等化され、商品はその価値ではなく、「生産価格」で交換されることになるのである。このような関係にある労働価値論と生産価格論とがたがいに矛盾しているなどというのは、マルクスの方法の不当な誤解にもとづくものである。第三巻でとりあつかわれた利潤率——それが生産価格の形成の決定的な要因であるが——は、資本総額にたいする剰余価値の相対的な大きさにかかっている。かくして第一巻における剰余価値の分析は、やはりマルクスの全体系の本質的核心なのである。

わたくしの聴きえたかぎりでは、ドップ教授のマルクスにかんする講義のなかには再生産論や恐慌論の問題はふくまれていなかったけれども、それはもとより教授がこれらの問題を重要視されていないことを意味するものではなくて、おそらくEaster Termのはじめに論ぜられたのであろう。

以上のドップ教授の「経済思想史」講義のわたくしなりの要約が、はたしてどこまで忠実に教授の真意を伝ええているか——とくにその特徴たる現代的視角という点において——についてはいささか疑念があるけれども、

わたくしがとくにたずねたいとおもった問題点については、つぎにのべるドップ教授との第三回目の会談でかなり聴きだすことができたので、それにゆずることにしたい。

## 十一

この第三回目の会談は、さきに昼食に招かれたお礼と、宮崎犀一氏が学期半ばに帰国されることになったのでやや早いがお別れの意味をかねて、二月八日（木曜）の午後七時に、二人でドップ教授をガーデン・ハウスの夕食にお招きしたときのことであった。食事の中の雑談はともかくとして、食後主としてわたくしの提出した多くの質問にたいして夜十時すぎまで実に真剣に答えて下さり、最大の収穫をえたとおもう。

第一の質問は、ドップ教授はアダム・スミスのいわゆる外面的方法にもとづく現象的分析を俗流経済学につながるものとしてきびしく批判され、リカードゥがブルジョア経済学の最高峯であり、理論的にマルクスにつながるものであるとされているようであり、そしてそのことはもちろん完全に正しいけれども、日本におけるスミス研究はいささか視角を異にしているという点についてであった。すなわち日本ではむしろ、スミスの道徳哲学と経済学とを一体としてとらえ——すなわち、いわゆる「アダム・スミス問題」の解決——、そして彼を市民社会建設の最大のイデオログとみなす見解が（二十年もまえから）有力である（高島・大河内・白杉三教授の業績をさす）。のみならずそれらのうちには、経済学は当初から広義の勤労人民の立場にたつ科学（すなわちブルジョアジーは当時の段階においては働く生産者階級の一翼であった）として（スミスおよびリカードゥによって）成立したという見解がある——すなわち白杉博士の見解である。この点についてのお考えをうかがいたい、ということであった。

これにたいするドップ教授のお答えは、わたしは日本におけるそのようなスミス解釈に同意する。とくに、経済学が当初から勤労階級の科学であったという見解は、「まことに興味ふかい」ものであり、全面的に賛意を表する。ただし、スミスとリカードゥとはあきらかに歴史的段階を異にしており、したがってそれぞれの理論の性格もかなり異なっていると考える、ということであった。

第二の質問は、右の問題と関連して、スミスのいわゆる「資本の蓄積と土地の私有にさきだつ初期未開の社会状態」とは、はたして単純商品生産社会——すなわち歴史的カテゴリー——を意味するものであろうか。それは——たとえスミスには意識されなかったにしても、——資本主義社会のもっとも基礎的な生産関係である商品生産関係——論理的カテゴリー——を意味するものではないだろうか。そのように考えなければ、スミスは資本主義社会については労働価値論を放棄したという謬見に、有効に対抗しえないのではないだろうか（拙著『科学的経済学の成立過程』六九—七二ページ参照）、ということであった。それにたいするドップ教授のお答えは、そういう見方にはある程度まで同意できる。論理的にみればたしかにそのとおりだろう。しかし実はイギリスの思想的伝統のなかには、そういう論理的思考はほとんどないのだ、ということであった。

第三の質問は、リカードゥについて、日本では、その労働価値論の研究はすでに三十年以上まえに一応おこなわれ、リカードゥの価値論の修正が労働価値論の放棄を意味するという謬見は論破されていた（主として森耕二郎教授の業績をさす）。——もちろんスラッファ氏と教授とによる新『リカードゥ全集』の刊行はこの正しい見解にとって有力な新しい論拠を提供したけれども。そして現在の研究の主要対象はリカードゥの資本蓄積論であり、彼の体系そのものをそのようなものとしてつかむ（スミスの体系もまたそうであるが）見解が支配的である。そのさ

い一つの問題点は、リカードゥ理論とセー法則との関連いかんであるが、日本では一般に（反対論もあるけれども）ミーク氏の研究成果（『イギリスにおけるリカードゥ経済学の衰退』『エコノミカ』一九五〇）は支持されている。しかし問題はさらに一歩すすんで、リカードゥが『原理』第三版の新「機械論」において、事実上資本の構成の高度化をみとめ、セー法則と矛盾するような新しい見解に到達していたか（前掲拙著一八八—一九一ページ参照）いなが、一つの焦点となっている。その点リカードゥの新機械論を「革命的变化」（Works, Vol. I, p. Ivi）と評価される、教授ヤスラフア氏は右のようなみかたを肯定されるであろうか、ということであった。これにたいする教授のお答えは、まず『全集』第一巻の解題を書いた者は自分ではなくスラフア氏であるということ、たしかに新機械論はリカードゥ理論にとって根本的な変化ではあったが、全体としてのリカードゥ理論はやはりセー法則のうえにたっているとみられること——このことにはもちろんわたくしも異議はないが——というように、『経済学と資本主義』第二章の見解とさほどの変化はないようにみうけられた。

第四の質問は、リカードゥとマルクスとの関係について、——ヘーゲルのことはしばらくおくと——日本では、率直に言ってイギリスの研究は、あまりに両者を直結しすぎているのではないかと、考えられている。もちろんマルクスは、古典経済学とくにリカードゥの理論の批判的つくりかえをつうじて、自己の理論体系をつくりあげていったのにはちがいないが、すくなくとも歴史的には両者のあいだにロバート・オーウェンとリカードゥ派社会主義者（および欧州大陸の初期の社会主義者）の経済学をおくことができるのではないだろうか。のみならずそれらは、経済理論の発展段階において、一定の意義をもっているのではないだろうか、ということであった。それにたいするドップ教授のお答えは、一言でいえば、そのようなオーウェンやリカードゥ派社会主義などの経

済学的研究の重要性は、十分に認めるということであった。

第五の質問は、教授は「近代経済学」批判の第一人者であるとおもわれるし、またそれらの理論にたいする造詣の深さには敬服するが、問題は、この最近のブルジョア経済学——とくにケムブリッジ学派——の発展のなかから、マルクス主義経済学者になにを学びとるべきであるか、主としてたれから、またいかなる理論を学ぶべきであろうか、ということであった。これにたいして教授は、それはたいへんな問題だ、それに答えるためには一巻の書物を書かねばなるまい、しかし、結局のところ問題は「近代経済学の科学性はいったどこにあるのか」ということではないか、と反問された。してみれば、教授の近代経済理論とその用具ツィグにたいする通曉にもかかわらず、ドップ教授の根本的な立場は、『経済学と資本主義』第五章「近代経済学の趨勢」におけるあのラディカルな批判——すなわち、数学的技術が特定の思考様式——この思考様式は、まず肉体からひきはなされた精神がエーテル化された選択の対象と靈交する世界をつくりだし、つぎにこの世界のなかで発見された諸法則があたかも現実の経済社会においておこなわれている諸関係を支配するものであるかのように表示することによって、思想を混乱させ現実を歪曲するものであるが、——にたいする奴隸的な奉仕をつづけるかぎりには、それによってかたちづけられる觀念は眞実をあきらかにしないで、むしろそれにヴェイルをかけることになる。それはすべてのものをさかだちさせることである。いまやわれわれは、このような異教から経済学を解放するという課題をはたさなければならぬ（pp. 188—4, 訳一七六—七ページ）という、近代経済学にたいするもっともすぐれた原理的批判——を堅持されていることを知ることができたのであり、満腔の敬意を禁じえないものがあつた。それに関連してわたくしの提出した、ケインズの積極的意義はどこにあるのかという問にはついに答えられな

ったが、Easter Termにもケインズについては講じないと断言されたし、また数年前教授を訪問された関西大学の杉原四郎教授にかたられたということは——「シュムペーターはケインズよりずっとすぐれている。シュムペーターのなかには部分的にマルクスの思想がとりいれられている。」——から察しても、教授の経済学者としてのケインズにたいする評価はきわめて低いものとおもわれる。

最後に第六の質問としてつぎのようによべた。教授は現在の世界における科学的経済学 (Political Economy) の最高峯であるとおもわれるし、教授が第二次大戦後の独占資本主義のもとにおいても生産力は発展しうるし現に発展しつつあることを権威あるマルクス主義経済学者として最初に指摘されたこと (「第二次大戦後の資本主義の諸変化(一九五七年)」に敬意を表するが、その後教授が主として計画化の理論を研究テーマとされていることは、教授がたんにイギリスの経済学者であるばかりでなく、社会主義諸国をふくむ世界の経済学者であるからであると考えてよいであろうか、と。これにたいして教授は、自分についてのことばはあきらかに過褒であるが、現代資本主義にかんする自分の最近の研究の怠慢を責められるのならばそれは当っているといわねばなるまい。(もちろんわたくしは、どんなにすぐれた学者も同時に二つの異なったテーマととりくむことはできないことはよくわかっているといつて、これを打消したが。)そして計画化の理論については、たしかに世界の問題として考えている(といふことはいまだちにイギリスの社会主義化を問題にしているわけではないという意味に解してよからう)のだが、とくに自分は一九三〇年代にこの問題にかかわりをもった(例の「経済計算論争」をさす)ので、その継続・発展として研究しているのだ、と答えられた。

こうして三時間以上にわたる真剣な応答から多くの教えをうけたことを感謝して教授に別れを告げ、やがて翌

日帰国の途につく宮崎氏とも別れた。

## 十一

一方スラッファ氏とは、最近の主著『商品による商品の生産』(Piero sraffa, Production of Commodities by Means of Commodities, 1960) の翻訳をなしとげ、その訳書出版の許可をえられた岸本教授門下の京大の菱山泉助教授の要請によって、主としてスラッファ氏の経歴をききだす目的で、二月十三日の正午からマーシャル・ライブラリーのライブラリアン・ルームで第二回目の会談をおこなった。同氏は好意にあふれる態度で、経歴についてもみずから筆をとってつぎのとおり書きおろされた。

ピエロ・スラッファ

一八九八、イタリヤ、トリノに生まれる。

一九二〇年、トリノ大学卒業。

一九二三年―二五年、ベルジア大学経済学教授。

一九二五―二七年、サルデニヤのカリアリ大学教授。

一九二七年、レクチュアラールとしてケムブリッジ大学へ招かれ、のちアシスタント・ディレクター・オブ・リサーチ・イン

・エコノミックスとなる。

一九二九年より、マーシャル・ライブラリーのライブラリアンとして現在にいたる。

なお、このときうかがったところでは、同氏はケムブリッジ大学ではじめは経済原論とくに価値論の講義を担当されていたとのことであった。(これで「スラッファ氏は気の毒だ」というドップ教授のことばの意味がよくわかったわけである。)

ところでこのときさきにお約束していた『リカード文献目録』（『関西大学経済論集』第八卷第六号）をさしあげたところ非常に喜ばれ、あとからわざわざお手紙で疑義のある個所を指摘してこられた。またリカード理論について一点だけ、すなわちさきにドップ教授がスラッファ氏のものと明言された、『原理』第三版の新機械論がリカード体系にとって「もっとも革命的な変化」を意味するという解釈の意義についてうかがったところ、それはかならずしも資本構成高度化の認識やセー法則と矛盾する見解が生じたことをいいたわけではないが、新機械論は全体としてリカード体系にとってもっとも本質的な変化のだと強調された。さらにかねてからドップ教授にもおたずねしていた、経済学史研究のすぐれた新人として、ケムブリッジ大学出身のイタリア人 P. Garegnani 氏をあげられ（この人のことはドップ教授もいわれていたが）、*Il capitale nelle teorie della distribuzione*, Milano, 1960 という価値論と分配論をとりあつかい、リカード、パレート、ヴィクセルを論じた著書のあることを教えられた。

なおこのときも、『商品による商品の生産』の内容についてはほとんど質問することができなかったが、本書がスラッファ氏のリカード解釈と密接なつながりをもち、古典派的な二つの基礎的前提——すなわち第一に、その研究が収益法則の問題と無関係なかたちでおこなわれ、したがって限界分析の方法が役立たないこと、および第二に、本書の表題に示めされているように、生産を、同種の商品が生産手段と生産物との双方にあらわれる複線的な循環過程としてとらえていること、——のうえにくみたてられていながら、利潤率の変化にもとづく価格変動のみを問題として、議論がすべて価格のチームでおこなわれているということ、<sup>(9)</sup> についてはつぎのような事実にかんがみて、その真意についていささか疑念をもたざるをえない。まず第一に、スラッファ氏がケムブリッ

シ大学に招かれる機縁となつたとおもわれる一九二六年の『エコノミック・ジャーナル』誌上の劃期的論文（『The laws of returns under competitive conditions, Economic Journal, xxxvi』）が、すでに収益不変の前提に立つて「価値を生産費にだけ依存させる理論」を「最良の適応性をもつもの」とみなしている（菱山・田口訳『経済学の古典と近代』九九ページ）が、これはドップ教授のいわれるように、主観価値論に対抗して事実上労働価値論の復位を主張するふくみをもつものであった（『経済理論と社会主義』訳一六一—一六六ページ）と考えざるをえないこと、——なおドップ・スラッパ両氏はたんに親交があり、理論的に近接しているという以上の、いわば肝胆相照らす仲にあるものとおもわれた。第二に、右にのべたようにスラッパ氏はケムブリッジ大学ではじめ、「価値論」の講義をされていたということ（それがすくなくとも限界効用価値論をその立場で講ぜられたものでなかつたことは、あきらかである）。第三に、スラッパ氏の『リカード全集』への解題が、リカードがその修正論によって次第に労働価値論を弱めていったといった解釈を事実によって論破したり（Vol. I, pp. xxxvii—viii）、例の一八二〇年のマカロックあての手紙にみられる生産費説的見解は、リカードの一時的な気迷いの産物にすぎなかつたとみなしたり（ibid. pp. xxxix—xl）、また遺稿「絶対価値と交換価値」にみられる、「交換価値の基礎によつたり、それと區別されるところの」、「絶対価値の概念を重視したり」（Vol. IV, p. 359）する解釈——それらはずから労働価値論に立っている者のみがよくなしうる解釈である——によつて一貫されていることである。したがつてわたくしは、スラッパ氏の新著は、たしかに独創的な見解を豊かにふくんだ劃期的な労作であるが、かしたんにその活字面だけから理解さるべきではない、——イギリス経済学界における同氏の微妙な立場が、かなりの程度までその表現の制約を余儀なくさせているのだ、——と考える者である。

(9) この書物については、すでに、共訳者である同志社大学の山下博助教授のすぐれた解説「スラッファの新著とリカア・ド・解釈」(『同志社経済学論叢』第十一巻第六号)がある。

ところでわたくしたちは、ケムブリッジ大学で Visiting Scholar として、聴講料なしですべての講義を自由にきき、セミナーに出席し、図書館を利用し(書物の貸出しは原則としてできなかったが)、コムビネーション・ルーム(教員のための軽食堂兼喫茶室)で昼食をとるなど、あらゆる便宜を提供されてきたが、二月二十三日夕方 Faculty の Chairman と Secretary から学部ミーティングへ正式に招待されたので、日本人ではただ一人出席して、ロビンソン夫人やスラッファ氏その他のスタッフと談りあい、欧米の諸学者に紹介されたが、このような外国の大学教授としての厚遇には、感謝のほかなかった。

なお、この年一月に来英されロンドン大学に留学して、主としてゴールドスミスズ・ライブラリーで専攻の重商主義文献の調査蒐集にあたっておられた、同志社大学の相見志郎教授が二月二十六日から四日間ケムブリッジを訪問された。そこでいっしょにトリニティ・カレッジにスラッファ氏を訪問し——このときは主として相見氏のガトコム・パークのリカードゥの家についての質問について懇切に教えられたり、カレッジのレン・ライブラリーで稀覯書を観せてもらったりした——、二十八日に同氏の最後のセミナーに出席し——この日は A. K. Sen 氏の On the Usefulness of Used Machines と題する報告で、きわめてスムーズにかつ和やかに進行した——、ドップ教授の講義をきき、教授に御紹介したのち、ロンドンへ帰られた。

そして三月二日の夕刻、ドップ教授にお別れの挨拶をするために、トリニティ・カレッジへうかがった。まず教授の講義およびたびたびの対談から多くの貴重な教えをうけたことを深く感謝し、またケムブリッジ大学のす

ぐれた学風から感化をうけたことを幸福におもうとのべた。そしてわたくしはいままで二人の恩師——岸本誠二郎教授と故白杉庄一郎博士をもってきたが、もし許されるならば今後は第三の偉大な師をもつと考えさせて頂きたいといって、お許しをうけた。さらに、日本には直接教授の教えをうけなくとも、その多くの著作から感化をうけた数多くの研究者がいることであるから、近い将来日本を訪問されるならば、必ずや大いなる観迎をうけられるであろうとのべた。教授は喜んでこの申し出を聴かれるとともに、杯をあげてわたくしの帰国の旅路の平安を祈って下さった。再会を希望しつつ別れを告げて、すでに暗闇につつまれたトリニティ・カレッジのグレート・コートの道をたどりながら、この偉大な学者である——わたくしは最後まで教授と政治にかんする問題は話しあわなかったけれども、教授が、「はじめにテーゼありき」式の虚偽の論証につとめる「御用学者」や、指令的にものをいい意見を異にする者にたいして「修正主義」のレッテルはりをおこなうこととする左翼官僚とは、まさに逆の、真に自主的にして指導的なマルクス主義学者であることは明白である——と同時に、なによりも偉大な人間であるドップ教授に、親しく接しえた幸せを身にしみて感じたのであった。

そして三月八日のドップ教授の最終講義を聴きおえて、翌九日ケムブリッジ留学中滞在した、ロイヤル・ホテルを立去るまで、なにか感慨のおさえがたいものがあつた。もっとも陰鬱なイギリスの冬をすごし、いろいろ日常生活の不便もあつたけれども、ケムブリッジ大学はそのうるわしい環境と壮麗な建物ばかりではなく、そのすぐれた学風と立派な学者たちによって、大学というもののあるべき姿を可能なかぎり体現しているようにおもわれた。わずか二学期間ではあつたけれども、いわば第二の母校を去るかのような、後髪をひかれるおもいを禁じえなかつたのである。

ロンドンでは、ふたたびユニバーシティ・オブ・ロンドン・ライブラリーでさらに若干の文献をマイクロ・フィルムにとつてもらい、とくにブリテイッシュ・ライブラリー・オブ・エコノミック・サイエンスで、リカード派社会主義の最後の代表者 John Francis Bray のコレクションをみた。これは著書、ハンフレット、新聞寄稿、自伝をふくむ草稿、書簡などを網羅した完全なものである。(なおロンドン大学の図書館やブリテイッシュ・ミュージアムについては、『経済セミナー』一九六一年五月号に遊部久蔵教授の詳しい紹介がある。)

こうして三月下旬にイギリスを立ち、パリ、アムステルダム、ニース、ミラノ、ヴェネツィア、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、アテネ、ジュネーヴ、ツェルマット、インターラーケン、チューリッヒ、ウィーン、フランクフルト、ハイデルベルク、マインツ、ボン、ケルン、デュッセルドルフ、ベルリン、ハムブルグ、コペンハーゲンの各地を、すなわちフランス、オランダ、イタリア、ギリシャ、スイス、オーストリア、ドイツ、デンマークの諸国を視察して、往路とおなじく北極経由で、六月はじめに帰国したのであるが、この旅行中直接自分の研究に関係のあるのは、アムステルダムの社会史国際研究所を訪問したことぐらいであるから、主題からははずれるけれども、最後に簡単にふれておきたい。

International Institute voor Sociale Geschiedenis は、一九三五年にナチスの政権獲得によって脅威をうけるにいたったドイツその他の国々の社会主義文献・資料を保護するために設立され、一九三七年にマルクス・エンゲルスの遺稿をふくむドイツ社会民主党文庫を購入し、現在約三〇万冊の蔵書をもつといわれている。すなわち、

イギリス、ドイツ、フランスその他ヨーロッパはもとよりロシアやアメリカなどの社会主義・労働運動関係の文献・資料の蒐集においては、おそらく世界随一である。 (この研究所についても遊部教授が『経済セミナー』一九六一年四月号に詳しく紹介されている。)

わたくしはアムステルダム滞在の日数の関係もあって、ただタイプされたマルクスの遺稿目録を書き写し、その現物のごく一部分を観ることができただけであるが、それでもつよい感銘をうけた。まずなによりも、この目録によって——M・E・L研究所編『マルクス年譜』(一九三四年)によっても知ることのできない——マルクスの手稿と抜萃帳の大部分(一部はモスクワのマルクス・レーニン主義研究所にあるのであらう)の詳細を、したがってマルクスの読書と研究の過程を詳しく知ることができたことである。初期のものではたとえば『Nationalökonomie und Philosophie (1844) 49S. & Die deutsche Ideologie (1845/46) 662S. その他多くの手稿を Say, Smith, Ricardo, J. Mill, MacCulloch, List, Simondi (シモンディ1844/45), Petty, Quesnay (1845), J. S. Mill (1845/47) その他の経済学者や Thompson (1845), Owen, Bray (1845/47) などの社会主義者からの抜萃帳が蔵されている。(以下) Owen の晩年の主著『The Book of the New Moral World』がこの時期に読まれているのは「驚いた」。後年のものでは、なんといつても『経済学批判』の続編として主として一八六〇年代に書かれた『資本論』の草稿であるが、その第一巻の草稿もあるが、とくに第二巻・第三巻の草稿が豊富なことは目をひくものがあった。またそのうちには九三七ページにおよぶ『剰余価値学説史』の草稿も存在する。

これらの手稿も抜萃帳もともに、野なしの大きな白紙におそろしく細かいジグザグの線のような字で書かれており、とうてい判読しがたいとおもわれるほどのものであるが、これによって、第一に超人的なマルクスの勉強

ぶりにいままらに驚嘆し、第二に初期の著作については Marx-Engels-Gesamtausgabe, Abt. I, に収められているものさえほんの一部分にしかすぎないこと、および第三に『資本論』の尠大な草稿がまだ陽の目をみないまま眠っていること、を知ることができた。それら未公刊の手稿・抜萃帳の刊行が容易に期待されえないとおもわれる現在、マルクス主義の成立過程についてはもとより、マルクスの経済学説の研究のためにも、国際的水準をぬくような研究は、この研究所に留学してこの難解な草稿を必要なかぎり読破することによってはじめて、可能なのではないかと感じた次第である。

わたくしは、ただこれらのマルクス遺稿の瞥見から、学問研究のおそるべき厳しさを、いまさらおもい知らされたというにすぎないかも知れない。しかしそれは、ケムブリッジ大学で経済学研究のあるべき姿についてつよい印象をやきつけられてきたわたくしにとって、また異なった意味で研究への強烈な拍車をかけられたものとして、十分有益であったと考える次第である。